

週刊 教育資料

2015年5月18日号

No.1342

EDUCATIONAL PUBLIC OPINION

<http://www.kyoiku-shiryo.co.jp>

>>> 好評連載

- **校長講話【3歳児の入園を祝う式辞】** 西林幸三郎／大阪芸術大学教授
- **教育問題法律相談【校庭の遊具の安全性に関する指針】** 佐藤香代／弁護士
- **特別寄稿【どうなる!? 新しい時代の高大接続】** 新田正樹／文部科学省高等教育局主任大学改革官



- ▼ **資料**【日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査の結果について(概要)】
◎ 文部科学省
- ▼ **マイオピニオン**【瞬発力と持続力】
◎ 尾崎春樹／学校法人目白学園理事長
- ▼ **グローバル教育を考える**【言語と教育―守勢に立つフランス語】
◎ 石川薫／川村学園女子大学特任教授
- ▼ **潮流**【アートと子どもの出会いの場】
◎ 堤康彦／特定非営利活動法人・芸術家と子どもたち代表①

堤康彦

つつみ・やすひこ◎ 1965年東京生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業後、東京ガス(株)に10年間勤務。その間に新設のホール等でダンス・音楽・美術のシリーズ企画をプロデュース。退社後、現代芸術家を小学校等へ派遣する活動「エイジアス」を開始。2001年に法人化。学校教育や児童福祉等の分野で子どもたちと芸術家の多様な出会いを専門的にコーディネートする。



堤 康彦氏に聞く①

特定非営利活動法人・芸術家と子どもたち代表

潮流◆題字奥野誠亮

潮流

アートと子どもの 出会いの場に

現代アーティストを学校に派遣することで、
子どもにとっては潜在的な力が発揮され、
アーティストも新たな表現を探る場になる。
そんな出会いの場を支援してきたという。

潜在的な力を伸ばす機会に

——貴団体ではどのような理念で、どのような活動をしていますか。

特定非営利活動法人・芸術家と子どもたちは、1999年に発足し、2001年からNPO法人として活動してきました。現代アーティストと子どもたちが出会う「場づくり」に取り組むことで、子どもたちにとっては潜在的な力を存分に発揮し伸ばす機会に、アーティストにとっては子どもたちと関わり、新たな表現を探る機会になると考えています。

主な活動としては、プロの現代アーティストが小・中学校や保育園・幼稚園などに出張して先生と協力しながらワークショップ型の授業などを行う活動（ASIAS）、閉校となった中学校を再生した「にしがも創造舎」（豊島区西巢鴨）を拠点に地域住民参加型の活動（ACTION!）、ダンスや演劇、音楽などのプロの現代アーティストを東京都内の学校やホールなどに派遣してワークショップを重ねながら子どもたちが主役のオリジナル舞台作品を創作して発表公演を行う活動（パフォーマンスキッズ・トーキョー）の三つがあります。

——現代アーティストと子どもたちの出

会いの場づくりのために、どのような役割を果たしているのでしょうか。

子どもたちのために私たちができることは、アーティストとの幅広いネットワーク、丁寧なコーディネート、豊富なワークショップのノウハウです。ダンス、音楽、美術、演劇など多彩なジャンルから、これまで100人以上の現代アーティストを招き、ワークショップを行ってきました。先生のニーズや対象となる子ども、地域の特性に合わせて厳選したアーティストをコーディネートし、先生や子どもたちとアーティストの架け橋になれるようにサポートしています。また、「アーティストを教育の場へ」という活動にいち早く取り組んできましたので、積み重ねてきたノウハウを活かしたワークショップの豊富な実績があり、自治体などとも連携した取り組みを行ってきました。

——どうして芸術家と子どもたちの出会いの場を作りたいと考えたのでしょうか。

私自身は、以前の仕事でさまざまな分野のアーティストと出会う機会がありました。個性的でアートの専門家として創造する力を持った人たちがああと感じて、こういう芸術家の人たちを子どもたちにも会わせたいと考えたのが最初のきっかけです。ただ、劇場や美術館などに子どもたちを連れて行

くという形だけだと、イベント的なものに終わるのではと思いました。アーティストの側が、普段子どもたちがいる場である学校に出かけ、子どもにとつての生活の場である学校で自然に出会わせたい。そして、何かのパフォーマンスを子どもたちに見てもらおうというよりは、子どもたちと一緒に活動するワークショップをやってみたいと考えました。

広がる活動の場

——例えば、東京都では小学校の図画工作科は専任の先生たちがいますが、そのような先生たちとのつながりはあったのでしょうか。

最初のころは、造形教育の専門家である図工専科教員の先生方とのつながりが多かったのですが、活動を重ねるにつれて、専科以外の担任の先生からも子どもたちにワークショップを体験させたいというニーズが広がりました。専科、担任どちらからも身体表現や音楽、美術などさまざまなアートのワークショップの希望があります。

2000年に活動を始めたころは年間で7校程度でしたが、2014年度には、地元豊島区教育委員会の事業で幼稚園・小学校9校・園、東京都の事業の関連で10校、

文部科学省の「児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験事業」関連で小学校17校。その他、小・中学校の特別支援学級や、さらには保育園、児童養護施設など、学校以外の場での活動も広がってきました。年間で、実施場所69カ所、実施日数は延べ316日、参加した児童生徒数は2164人になっています。

——特別支援学級や通常学級でも普段はなかなか活躍できない子どもたちも楽しみながら取り組める内容ですね。

学習指導要領では言語活動が重視されていますが、学校現場では、言葉・言語を使うのが苦手という子どもたちも少なからずいます。特に小学校では、全ての子どもたちが生き生きと活動できる場面を作りたいという担任の先生方のニーズがあります。例えば、クラスづくりや学級経営の観点から、互いの信頼関係を築くような身体表現のワークショップをすることもあります。学校に伺って、子どもたちの普段の授業を見学することもありますが、例えば、発表の仕方や言葉の使い方などを細かく決めていることも増えているように感じました。もちろん、言語技術も含めて、言葉の使い方を決めておかないと、なかなか発表できないという面もあると思いますが、その子

どもらしい表現の仕方が、もつとあっても良いのではと感じることもあります。

——子どもたちと接するアーティストの感性も担任の先生とは違う面があるのでしようね。

あるワークショップで、アーティストが「あつ、その表現、面白いね」と注目した子どもが、普段の授業ではなかなか活躍できない、どちらかというと課題の多い子だった、というケースもあります。そのことで、子ども同士でも、互いを見る目や関係性が変わっていくことがあります。

——授業として成立させるために配慮していることは何でしょうか。

担任や専科の先生と、事前にアーティストが授業のねらいや進め方なども含めて、打ち合わせをきちんと行うようにしています。また、授業が終わった後の「振り返り」の打ち合わせも重視しています。学校の先生方は、1時間の授業の「ねらい」や「めあて」が明確で、できなかったことができるようになることを目標に計画的に授業を進めていくことが多いと思います。

アーティストの場合は、事前にある程度のねらいは考えますが、授業の中で子どもたちが試行錯誤するプロセスや、即興性やライブ感などを大事にして、子どもの反応

を見て進め方を変えていくことも少なくありません。こうしたアーティストの子どもとの関わり合い方から刺激を受けて、「勉強になった」と言う先生方もいます。

どんな表現にも間違いはない

——ワークショップでは、どのような活動をしているのでしょうか。

ある小学校の特別支援学級で、道徳の時間に、音楽を通じて自分の感情を表現するというワークショップを行いました。講師に起用したのはさまざまな楽器の演奏ができ、作曲もできるミュージシャンでした。

美術家の岡本太郎の絵を子どもたちが見て、感じたものを楽器で表現する活動や、それを一つの曲にして、みんなで歌う活動をしました。授業は教える・教えられるという関係がありますが、ワークショップの場合は、どんな表現をしても良い、間違いなどはない、という立場でアーティストも子どもたちと対等に接する点に特徴があります。アーティストは担任の先生とはまた違った視点で、子どもたちが見せた、一瞬の表現、身体動きなどに注目します。考え方や表現の仕方の持つ「多様性」を、そのまま認めて価値付けるわけです。

——子どもたちと接するアーティスト自

身も、子どもから影響を受けることはあるのでしょうか。

私たちが紹介するアーティストは、新しいアートを創造しようとする人たちです。で、今までの表現を打ち破ることを常に意識しています。ですから、子どもたちが見せる新しい表現に出会うと、とても感動します。子どもから刺激をもらうことが楽しいというアーティストが多いのです。

——アーティストとの出会いは、子どもたちにとってどういう機会になっているとお考えですか。

現代アーティストとの出会いは、子どもたちにとって単に芸術に親しみを感じる機会というだけのものではないと思います。子どもたち自身の創造性を引き出し、他者とのコミュニケーションを促し、ものの見方・考え方を変え、ひいては彼らの自己肯定感を高めるなど、まさしく学びや育ちにとって最も重要な体験をする場になっていると思います。一人ひとりの子どもがワークショップで何を感じ、何を表現しようとしているのか、じっくり見つめることから、その答えを探ることができるのではないでしょう。

特定非営利活動法人・芸術家と子どもたち

<http://www.children-art.net/>

潮流

潮流◆題字奥野誠亮

特定非営利活動法人・芸術家と子どもたち代表

堤 康彦氏に聞く①

創造性とコミュニケーションのプロ

——アーティストを学校に派遣する活動が注目されている理由は何でしょうか。

アーティストは創造性（クリエイティブティ）と、人との関係性を築いていくという広い意味でのコミュニケーションの、二つの分野のプロです。このアーティストの持っている力が今の子どもに十分に育っていないのか、あるいは先生方が創造的に教えるのが苦手なのかは分かりませんが、社会的にも、創造性とコミュニケーション力が求められるようになっていくことが背景

創造性、多様性を育む機会に

子どもたち自身の創造性を引き出し
他者とのコミュニケーションを促す
ことで自己肯定感も高まっていく。
こうした協働の場を広げたいと言う。

にあると考えています。

——学校でアーティストの方はどのような関わり方をしているのでしょうか。

アーティストは何かを創り出すプロと言えますが、一口に創造性（クリエイティブティ）といっても多様な過程があります。例えば、ダンスアーティストの新井英夫さんは学校でのワークショップでは、「体をほぐす」「他者とかかわる・つながる」「創る」という三つの段階で組み立てています。つまり、何かをいきなり1人で創るのではなくて、そのためには体をほぐしたり、五感を最大限に発揮できるようにしたり、ア

イコンタクトなども含めて他者と豊かに関わることを通して、集団で動きやダンスを創っていくことを大切にされています。

身体表現でも、最初は動きが硬かったり、固定観念を持っていたりしますが、それをアーティストがある意味で崩していくような関わり方をする中で、子どもたちの表現も一段階、上がっていくことがあります。

——特別支援学級での活動例が増えていると聞いています。

7年前くらいから、特別支援学級での活動も始めています。発達障害なども含めて、普段の学校生活ではさまざまな「生きにくさ」を抱えている子ども、中には感覚過敏の傾向がある子どももありますが、見方を変えると、こうした子どもたちには人間がもともと持っていた繊細な感覚を備えていたり、ある種の「こだわり」を持った子どもであると言えます。ですから、同じような表現上のこだわりを持つアーティストと不思議な「同調」をする場面もあります。教科の学習ではなかなか活躍できなかった子どもが、アーティストとの表現のワークショップではきらりと輝くパフォーマンスを見せることが多く、アーティストの側も刺激を受けているようです。最近では、通常学級よりも特別支援学級などでの活動例が



特定非営利活動法人・芸術家と子どもたち代表

堤 康彦

つつみ・やすひこ 1965年東京生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業後、東京ガス(株)に10年間勤務。その間に新設のホール等でダンス・音楽・美術のシリーズ企画をプロデュース。退社後、現代芸術家を小学校等へ派遣する活動「エイジアス」を開始。2001年に法人化。企業、自治体、国など協働・支援先を広げ運営を拡大。学校教育や児童福祉等の分野で子どもたちと芸術家の多様な出会いを専門的にコーディネートする。

増えているほどです。

——学力向上という現場の課題とはどう関わりとお考えでしょうか。

我々が行っているアーティストの「授業」は、直接的に子どもたちの学力を高めているものではありませんが、子どもたちが互いに相手のことを前向きに捉えたり、互いの良さを認め合う機会になることで、授業にも積極的に参加するようになるなど、学級づくりのベースになる部分を耕すことにつながっており、間接的に学ぶ意欲の育成などに貢献するのではと思っています。

特に最近では、学校現場に若い先生方が増えていますので、学級づくりや授業への前向きな姿勢を育てるために私たちのワークショップを活用したいと、校長先生方などから要望されることが増えてきました。

——派遣の依頼が学校からある場合、どのような期待があるのでしょうか。

いろいろなケースがありますが、校長など学校の管理職が「子どもたちの表現力を高めたい」「一つのをみんなで作りに出して達成感を味わわせたい」との思いから、若い先生方に芸術家とのワークショップを

授業に取り入れることを勧める場合もありますし、担任の先生から申し込みがあって、授業の様子を校長先生などにも見ていただいて、子どもたちの表情の変化を見た校長先生から評価をいただくこともあります。校長先生などにうかがいますと、子どもたちの表現力や感性などとともに、若い先生方の表現力や感性がアーティストと接することで刺激を受けて、豊かになっていくことを期待していることが多いようです。

中学校ではダンスの専門家に期待

——中学校との関わりでは、何か特徴がありますか。

保育園・幼稚園や小学校での活動例が多いのですが、中学校では、特別支援学級や保健体育科でのワークショップの授業例が増えていきます。保健体育科では「ダンス」が必修になったこともあって、ダンスの専門家のアーティストから学びたいというニーズもあるようです。以前は、選択教科の授業などで、教科学習の一環でアーティストが関わるケースもありましたが、最近では、保健体育科のほか学校行事などの中でアーティストとのワークショップの時間を設定する中学校があります。

中学生にとっても、アーティストに限ら

ず、学校外のさまざまな社会人と接する機会を増やしていくことが、将来の生き方などを考えていくきっかけになるのではないのでしょうか。

——行政との関わりは怎么样了ののでしょうか。

例えば私たちの活動の機会で、東京都豊島区の幼稚園、小・中学校などで実施するケースがあります。これは豊島区教育委員会が予算に計上した上で、私たちの団体にコーディネートを委託するケースで、行政として積極的にアーティストが学校などに外かけて、先生と協力してワークショップ型の授業を行うことを支援しているということは意義深いことだと思います。

全国状況を見ますと、こうした活動にストリートに教育予算を付けている自治体は少ないのが現状です。文化行政の観点から、例えば公立の劇場や美術館などが学校と連携していくなどの動きは広がっています。全国的に、教育行政の立場から、学校などにアーティストを派遣する取り組みを支援する動きがもっと広がってほしいと願っています。私たちの団体で言えば、先ほど触れた、豊島区の「次世代文化の担い手」育成事業、文部科学省の「児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現

体験」事業などは貴重な事例と言えます。

企業も社会貢献活動として支援

——全国的に学校にアーティストを派遣する動きは怎么样了ののでしょうか。

先ほど触れましたが、全国各地の劇場や美術館などでアウトリーチ活動の一環として地域の学校と連携しているところがあります。ほかには、10年前からトヨタ自動車さんと私たちで「トヨタ子どもとアーティストの出会い」というプロジェクトを進めています。アート系のNPOやキャリア教育にかかわるNPOなども参加しています。北海道から九州まで全国に13の拠点となる団体等がありますので、こうした場や機会を活用することもできます。このように企業が社会貢献の活動の一環として人材育成という視点から支援することもあります。

——今後の活動上の課題について、どうお考えですか。

学校の授業で言いますと、国語や算数の授業ですと、その達成度をテストなどで測定して評価していくことができます。しかし、私たちが行っているようなワークショップ型で、子どもたちの表現や他者との関わりのプロセスを重視している活動を、どのように評価して価値付けていくのか、あ

るいは社会一般の方にその価値を理解してもらえようにするかが、課題になっていると思っています。

例えば、青山学院大学の荻宿俊文教授は「ワークショップデザインー育成プログラム」という講座を推進していますが、ワークショップでの子どものつぶやきや表情の変化などを定量化していく試みを研究されています。評価やエビデンスを明確にするためには、こうした研究の成果なども踏まえて、これまで蓄積したワークショップのテキストや音声、動画などの記録を分析する必要がありますが、かもしれません。

——外国では芸術家と学校との関係など、どのような動きがあるのでしょうか。

特にイギリスやアメリカでは、創造性を育むという視点から熱心に取り組んでいますし、最近では、韓国なども国策として力を入れています。今後、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、スポーツだけでなく文化の発信、グローバルな視点で表現できる力を育てていく観点からも、アーティストと子どもたちの協働による創造性を育む機会が広がってほしいと願っています。

特定非営利活動法人・芸術家と子どもたち

<http://www.children-art.net/>